



## エキゾチック？、ノスタルジック？

ここは小樽である。レトロである。  
運河も倉庫も住宅もレトロである。

レトロとは伝統と現代の中間にある。あまり古すぎてもレトロとはなりえないし、新しいものは論外である。その意味で、日常と非日常との微妙な境界線上にレトロはある。だからノスタルジックなのだ。

しかし今日、あの運河や倉庫はわれわれの眼前にはない。あの住宅にわれわれはもはや住むことはできない。絶対に生活の一部にはならない。この意味でレトロはエキゾチックなのだ。

だが、生活の一部とならないものはどうなのだろう。いや、正確にいうなら、生活の一部ではあるものの、決してそうは意識されないもの…。これらにわれわれは最も自由なのかもしれない。その意味で、運河も倉庫群も自由はない。逆に家にも庭にも日常用具にも自由はない。斬新なデザインの椅子を思い浮かべてみればいい。「自由に」デザイナーが思考をはばたかせたそういった椅子をわれわれは購入し、そして使用するだろうか。机だってそうだ。



北海道小樽市舟見坂  
2000.9.5



北海道小樽市手宮小学校付近・  
2000.9.4  
インタビューへ向かう道すがら

ここにあるのは消火栓である。日頃絶対にお世話になることはない(お世話になりたくもない!)。消火栓の色は消防法で決まっているという先入観をもっていたが、小樽で見る限り色は自由に選べるのだ。

赤もあるし黄色もあるし、青もある。ご丁寧にミックスまである。尋ねてみても色による違いはなく、地域によって自由に塗り分けられるのである。

誰もこんなもの、見向きもしないだろう。観光地小樽を訪れるゲストも、港町であり商業都市であり百万都市札幌に通う通勤圏に住むホストも...



北海道小樽市長沢・2000.9.6  
赤井川への道すげら

ただ、観光地では伝統的町並みや「手つかずの自然」を求めてやってきた者はコンビニや自販機の存在に眉をひそめる。または、「ナンヤ、フツの町やんか」といった失望感をともなう感想をもつ。一方で、自販機なし、コンビニなしでも不満は出てくる。

どちらにしても大いなる錯覚である。しかし、大いなる錯覚を責めても実りはない。でも消火栓はそうした「観光のまなざし」を超越しているかのように、ただ立っている。おそらく、小樽のネイティブたちもその超越的存在を意識することはなからう。

たぶん、こうした些細な存在を発見しうる者がいるとしたなら、それはゲストとホストとの境界にたつ人間たちだろう。観光のまなざしでもない、地域という拘束の中に息する存在でもない、そういった人間たちなのだ。

坂をあえぎあえぎ登るときふと振り返った港の景色と消火栓、見上げた緑の山々をバックに妙に存在感を示す消火栓...。この風景は単なるゲストにも、はたまた生まれ育ったホストにも見出されることはない。ただ、旅と住のはざまにたつ旅人たち、みやげ

話とお土産のために帰ることが義務づけられたツーリストではなく、帰還なき旅人、「自由」という名の哀調をおびたトラベラーがみるものなのだ。



北海道小樽市最上  
2000.9.7  
「グラス・ムラ」へ